

新型コロナウイルス感染症【5】

2020/6/4 (加藤良一記)

分かりにくい新聞記事

先日、読売新聞社会面に<『**コロナ最前線**』@PCR検査機関>と題する記事が掲載されていました。見出しは『1滴に集中 精密判定』、中見出しに『検体3ミリ間隔で配置』。

名古屋市衛生研究所の検査現場を取材したものです。主な内容は、スマートフォンほどの大きさで96個の小さなくぼみがあるプレートに検体を入れること、続くPCRの簡単な説明、検体処理能力が時と共にどう変わってきたか、感染第2波に備え体制を固めていることなどを紹介しています。

そこでちょっと気になったのが『1滴に集中 精密判定』はなんとなくわかるとして、『**検体3ミリ間隔で配置**』は96穴の**マイクロプレート**のウェル（穴）の間隔を指すと思われるのですが、一般の人がすんなりと飲み込めるのでしょうか。余計なことかもしれませんが、社会面に載せるには言葉が足りないと思うし、独りよがりの気がしないでもありません。読者は首を捻りながらもスルーするのではないかと心配になります…

コロナ禍の図書館 それでもベートーヴェン企画展開催

埼玉県立久喜図書館では、年間を通していろいろな企画展を開いています。6月2日から7月30日までは、「**生誕250周年記念「楽聖ベートーヴェンの音色と、その生涯**」

を開催しています。図書室に関連資料の展示コーナーを設け、視聴覚ホールではCD鑑賞会を行っています。一向に衰えを見せない新型コロナウイルス感染症、図書館の熱意とは裏腹に訪れる人もまばらです。

図書室入り口のいつも新刊などを展示しているコーナーに、ベートーヴェンにまつわる書籍やCD、レコードなど200点ほどを集め分かりやすく展示、貸し出しをしています。何冊か手に取り読みし借りました。CD鑑賞会は、「**ベートーヴェンの調べ 苦悩を突き抜け、歓喜に至れ**」と題して、ピアノソナタ「**悲愴**」、ピアノ協奏曲「**皇帝**」、交響曲**第9番**が流されました。



久喜図書館は、自然科学、技術、芸術、言語、文学を担当し、熊谷、浦和とそれぞれ専門分野を分けています。使用可能なロッカーは半分以下に減らされています...

貸出しカウンターも嚴重に封鎖！ 通路も入り口と出口が分けられていますが、そんなこと構いなしのおじさんが出口から入って行く...。ダイヤモンドプリンセス号のエリア分けと同じか！ といっても、線を引いただけで分離できるわけがありません！



借りてきた本の一冊<音楽現代>7月号では、特別企画「**新型コロナウイルス禍の音楽界 ～その“現状”と“これから”**」が組まれていました。公益社団法人日本演奏連盟理事長の堤 剛さんの寄稿「**新型コロナウイルス蔓延の現下の演奏界、演奏家の状況について**」では、将来より素晴らしい芸術活動を繰り広げるために基盤作りのお手伝いをするため、『**文化芸術復興基金（仮称）**』の設置を政府や文化庁に求めるとしています。

これは、超党派の国会議員で組織された文化芸術復興議員連盟により3月23日に緊急決議されたものです。フリーランスの演奏家（個人）に対する支援をはじめとして、臨時休校で閉鎖された学校で影響を受けた子どもたちのための保護者支援や、事業者向けの資金支援などを行います。

[4]  **[5]**  **[6]**

Back

[虫めがね Top ^](#)

Home

[Home Page ^](#)